並里 成

アメリカ生活スタート

スポルティーバ７月号（2008年5月24日発売）より

「走るバスケなら、トップでもやっていける自信はある」

スラムダンク奨学金制度の１期生として、４月上旬に渡米した並 里 成を訪ね、サウスケントへとやって来た。
我々の不安をよそに、彼は元気いっぱいに新生活をスタートさせ、この人口が600人にも満たない小さな町で、
大きな夢に向かって、確かな第一歩を踏み出していた。

宮地陽子●取材・文・撮影
text & photo by Yoko Miyaji

ニューヨークのＪＦケネディ空港から、マンハッタンの摩天楼を左に車で北上すること約２時間。車通りも少なくなり、街灯も照らさなくなったあたりに人口600人にも満たない小さな町、サウスケントがある。そしてその町の人口の約半分が全寮制の私立プレップスクール、サウスケント校の学生である。スラムダンク奨学金の１期生、並里成もここの学生として、これから１年余を過ごす。沖縄市に育ち、福岡市の高校に進学した自称「都会好き」の並里にとって、初めて経験する田舎暮らしである。

「思ったより田舎。こういうところに学校を置いても成り立つんですね」と並里。「生活はゆったりした感じ。みんなフレンドリーで、よく声をかけてくれる」と、約３週間暮らした感想を語る。

学校の入り口近く、池の畔には、何十年も前に日本人留学生が卒業するときに植えたという桜が満開に花を咲かせていた。そこだけ浮いているわけでもなく、全体の風景に溶け込み、かつ彩りを添えていた。まるでこの先、並里がアメリカで進むべき方向を示しているようだと思うのは考えすぎだろうか。

この広い学校の敷地が、今の並里の生活圏だ。学内にある寮の部屋は中国人留学生との相部屋。二段ベッドとふたつの勉強机以外にはほとんどスペースもないくらい小さな部屋だ。食事は３食とも学内のカフェテリアで食べる。バイキング形式になっており、各自好きなものを自由に選んで取ることができる。とはいえ、ここはアメリカ。ご飯に味噌汁というわけにはいかない。

「アメリカの食事は食べられないわけではないけれど、何が身体にいいのかがわからない。日本食だったらこれを食べたらいいっていうのがわかるんですけれど」

18歳の割に、普段から選手であることを意識した生活を送っている。

日本のもので一番恋しいのは湯船だという。寮には、狭い空間に共同のシャワーがふたつあるだけ。

「風呂はゆっくり入りたい派なんです。風呂に入ると筋肉の伸びが違う。入らないと次の日まで疲れが残るんですよ」と、これも選手としてのこだわりだ。

授業は、もちろんすべて英語。到着した当初は歴史や数学など一般の授業を受けていたが、まずは英語で理解できることが必要だということで、現在は英語の集中講座を受けている。

「聞くほうはだいぶ慣れてきて、言っていることはだいたいわかるようになってきているんですけれど、喋るのは難しい。早くみんなとコミュニケーションをとれるようになりたいです」

寮の部屋、食事、英語など多少の不便はあるが、バスケットボールをやるには、最高に恵まれた環境だ。体育館は一日中開放されていて、授業がない時間にはいつでも使うことができる。コートの横には、本格的なジムもある。

アメリカ生活スタート

スポルティーバ７月号（2008年5月24日発売）より

チームとしての活動はオフの時期に入っているため、今はチーム練習はなく、個人練習をしたり、夜、体育館に集まってきたチームメイトたちとのピックアップゲームをする毎日だ。去年秋にサウスケントに来たときにもトライアウトを兼ねたピックアップゲームをしたが、そのときとは違い、すでにチームの一員となった気分で思い切りよくプレイできているという。

これだけすぐにアメリカのスタイルに適応できるということは、逆に考えると日本では少し窮屈だったのではないだろうか。そう聞くと、並里は苦笑しながら、「正直、ちょっと……」と、言葉の最後を濁しながらも、肯定した。

「日本のバスケのスタイルはちょっと独特な感じなんですよ。チームプレイというか、ひとりひとり、これしかやったらだめっていうのがあって。（他のことは）それをこなしてからっていうところで、ちょっと窮屈感がありましたね」

ここ、サウスケントで窮屈なのは寮の部屋とシャワーであり、コート上ではそんな窮屈さを感じることはない。

それでも、実はサウスケントに来るに当たって、ひとつ気がかりなことがあった。去年秋のトライアウトのときに並里に合格を出してくれたヘッドコーチが、その後シューズメーカーの育成部門にヘッドハンティングされ、学校を離れていたのだ。後任に就いたのは以前コルゲート大でアシスタントコーチをしていたケルビン・ジェファーソン。大学でのコーチング経験が豊かな人だが、実際に自分のプレイを評価して合格を出してくれたコーチではないということが気になっていた。果たして、新コーチも自分のプレイを気に入ってくれるのだろうか。彼がコーチするチームのスタイルは自分にあっているのだろうか。そんな不安な気持ちは、ジェファーソン・コーチに会ってすぐにやわらいだ。

「すごく優しそうで、バスケットボールの経験がありそうな感じですね」

さらに、ジェファーソン・コーチがやろうとしているのが、走るバスケットボールだと告げると、「本当ですか？」と目を輝かせ、その上で力強く宣言した。

「そういうバスケなら、自分、トップでもやってける自信があります」

目標とする地は、まだ姿かたちも見えないぐらいずっと先にある。しかし、目の前の道がそこに続いていることを確信して、彼は今、一歩目を踏み出した。